

久しぶりの尿道責めで、前立腺を中と外の両方から挟まれてドSにいじめられた話をしてもいいですか

体験版

隠れS兄貴肌タチ専リーマン×隠れM強気ツンデレネコ専リーマン

受け：真壁

攻め：菅原

要素：恋人同士、強気受け、媚薬、玩具、尿道責め、前立腺挟み撃ち、射精管理、連続絶頂、おねだり、結腸責め、失神

「今回の案件、あまりにもシビア」

癒しが足りないとぼやく恋人を、僕の家招いてからおよそ3分。冷やしていたビールを口にするなり、この1か月で少しやつれた菅原さんが、彼にしては珍しく弱音を吐いた。

元々菅原さんは、軽めの愚痴はよくこぼす人だ。でも、基本的には聞き手側が笑って流せるレベルのものしか言わない。そんな彼が、ここ最近では相当疲労が溜

まっている。濃いくまを目の下に浮かべる彼は、日々の忙しさを顔にも滲ませていた。

「菅原さんが今担当してるのって、悲願の取引先なんでしたっけ？」

「そう。でも異動やらなんやらあって結果的に俺が持ってるだけで、本来もっと上の立場の人が持っても全然おかしくない」

彼が全身の脂肪をもぎ取られる要因となったのは、社をあげて何年も通い詰めた取引先と、念願かなってようやく契約が取れたためだ。ただし向こうもこちら側の立場を理解したうえで色々と無茶を言ってきて、納期などは通常よりかなり短く設定されている様子だ。

本当は僕も仕事を手伝いたいけれど、あまり手伝い過ぎたら菅原さんの手柄を横取りするみたいで嫌だ。菅原さんは謙遜して俺なんかがと言うけれど、彼自身もかなり通い詰めていた会社だったから、菅原さん本人の貢献もそれなりにあると思う。

なのでなんの足しにもならないかもしれないけれど、まずは言葉でのメンケアに取り組んだ。

「ちゃんと菅原さんの貢献も生きてますって。頑張ってくださいよ、菅原さんは僕を育てた大先輩なんですから」

「お前を育てたのは、ものの2週間程度だけだな」

「それでも僕の教育係には違いありませんよ」

「ああ、しんどい、癒されたい。もっと多忙なお前はよくやってる、本当に偉いよ真壁は...」

けれども言葉による癒し効果は皆無で、彼の心は増々沈んでいった。しかも僕に抱きついてへろへろしている菅原さんは、テーブルの上で着信を知らせたスマホを見て、更に顔色を悪化させている。電話の内容はきっと、例の件の進捗に関することだろう。

「...菅原さん、鳴ってますよ」

「うん」

「流石に分かっていて無視するのは、大人として見逃せませんよ」

「うううん...」

ぎゅう、と僕に抱きつきながら嫌々期を発動させている菅原さんは、見た目以上にかなり参っている様子だ。なんだかんだあって電話には出たけれど、電話を切った後も頭を抱える彼を見ていると、僕も胸が痛くなる。

さて、これはなんと励ましたらいいのだろうか。できれば彼の心や身体に一発で元気が注入され、即座にやる気がでる特効薬があればいいのだけれど。あいにく現代医療の力をもってしても、そんな魔法の薬は開発されていない。だからその代替え品になるものがないかと、他の業務メンバーに次々と指示を出す彼を見ながら、僕も頭を悩ませた。

とはいえ、栄養ドリンク1本でどうにかなる話なら、菅原さんは仕事の後にわざわざここに来たりはしないだろう。疲れた彼が僕の元へと癒しを求めに来ている

のだから、やはりシンプルにいった方が良いのかもしれない。だから指示出しを終えた菅原さんに、今度は僕から抱きついて、僕なりの特効薬を使ってみた。

「菅原さん。菅原せーんぱい」

「なんだいきなり。最近の後輩面もあんまりしなくなったのに」

「先輩は、この山を越えたら。僕に先輩の好きなこと、なんでもしていいって言ったら。それを楽しみに、もうちょっと頑張れますか？」

わざと腰を押し付けながら、上目遣いで彼に言う。全身で性的なアピールをするのは、「なんでも」の中に大人の要求も含まれていると暗に示しているからだ。あとは、菅原さんがどうしてもと思うなら、今日もしても良いですよの意もこもっていた。

すると、僕の発言を150%の理解で受け取った彼は、どちゃっと僕を押し倒してきた。そして先ほどまでは生気を失っていた目を怖いほどに光らせて、僕に質問をしてくる。

「今の話が嘘だったら、俺はめっちゃくちゃ悲しい。これ、嘘じゃないよな？」

「うっ、嘘じゃないですよ。本当です」

「ちなみに真壁の言うなんでもっていうのは、どの程度のくくりか聞きたい」

「えっ、そ、そうですね…。痛くないやつなら、なんでもって感じですよ」

「なるほど、なるほど」

そして話しながらも僕のシャツをめくってくる菅原さんは、最低限の確認をしてから即座に胸に吸い付いてきた。はいはい、やるのね、疲れていてもこっちは別腹なんですねと、謎の元気を出した恋人の頭を撫でる。すると彼は、ずるずると僕の下にはいていたものを全て脱がせてから、内ももにひとつキスを落とした。

「めちゃくちゃみなぎってきた。俺、今なら世界最高峰も登れるわ」

「それは何よりです」

「忙しくて構えなくなならないように、今日やりだめしておいていい？」

「週の半ばなんですから、ほどほどにしておいてくださいよ」

「出来る限り加減する」

にっと笑って僕の股の間に顔を埋めた彼は、意気揚々と僕の熱にしゃぶりついてた。それで元気が出るのもどうなんだと思ったけれど、疲れ切った顔でいられるよりは安心なので、今日のところは目に見ておく。

ただ、彼の行いで唯一見逃せない難点があるとすれば、湧いてきたやる気を全部僕の中に放っていったことだろうか。あろうことか、3発も中出しするなんて。

加減すると言ったくせに、行動が伴っていない。

けれど文句はあるものの、この日を境に彼は3割増しでバリバリと精力的に働くようになったので、僕の特効薬の効果はあったと思いたい。

そして菅原さんの頑張りのかいもあって、それから約1か月後、ようやく山場は超えたらしい。金曜日には打ち上げだと、疲れを残しながらも晴れやかな顔で飲み会に向かっていった。

でも実は、僕は昨日のうちに彼から連絡をもらっていた。飲み会は1次会で抜けるから、その後ホテルで落ち合おうと。それに僕も、分かりましたと返した。流石に菅原さんの言葉の意味がくみ取れないほど子どもじゃない僕は、了解した時点で宿泊以外の部分も受け入れている。だから必要なものは持参した上で、先に指定されたホテルの部屋で彼を待っていた。

男2人でも入れて、週末の宿泊時間も長く取れるこのホテルは、僕らがセフレだった頃からお世話になっている場所だ。最近はめっきり使用頻度が減ったけれど、当時と変わらず設備も良くて広々とした部屋で、仕事を忘れて一息つく。

ゆっくりシャワーを浴びてから時計を見ると、時刻は21時近かった。菅原さんの飲み会が終わるのは、早くても今くらいだろうか。2次会以降は断ると言っていたけれど、今回の功労賞である菅原さんは、簡単に解放してはもらえないかもしれない。愛されるタイプの先輩だからなあと、広いベッドに一人、バスローブ姿で寝転がる。でも、僕も僕で疲れていたのも、寝転がっていたら眠くなってきた。ただ待つだけだと暇だなあと思いながらも、ウトウトとしていた僕は、そのまま眠りについてしまった。

でも、このひと眠りが今後の致命傷になると分かっていたら、僕は絶対に眠ったりしなかったのに。やはり何事も、後悔は先に立たない。

それから、何やら物音がするのに気が付いて目を覚ますと、鼻歌交じりの菅原さんが目の前にいたので驚いた。だけれど同時に、なんだか肌寒いし、しかも動きづらい事にも違和感を覚える。

「ッ、す、菅原さっ...！？わ、すいませ、僕寝てて」

「いいよ、お前も疲れてたろ？俺も逃げられなくて2次会まで連行されたし。待たせて悪かった」

「まあ、ホテルは宿泊で取ってますから、時間は全然いいんです、が...！？」

話しながら、やはり彼は長丁場の飲み会に連行されていたことを知る。それは元より予想していたことだったので、僕としては特に問題はない。むしろ問題なのは、動かしにくい自分の右側だ。なんだか不自由だと自分の右手に目をやったとき、今から我が身によからぬことが起きるのが確定して寒気がした。

右手首と右足首が、頑丈なベルトで固定されている。間にある紐に若干の伸縮性はあるけれど、10センチ程度しか動かせない。なんだこれは、寝ている間に裸にひん剥かれたうえ、利き手の自由まで奪われていたのか。好きにしていいたいと言いはしたが、許可なく縛るのはいかななものかと、ほろ酔いの恋人に文句を言う。

「ちょっと！なんですかこれ！なんで縛ってるんですか！？」

「そりゃあお前、なんでもしていいって言われたし」

「確かにいいとは言いましたが！普通はやる前に、したいことの擦り合わせをすべきかと思いますが！」

「はいはい、ごめんなさいね～。でも俺、もう準備しちゃったんで。諦めてエッチなことしましょうね～」

「～～ッ、この酔っ払い！変なことしたら承知しませんよ！」

「あれあれ、いいのかな～？そんな反抗的な態度取っちゃって。今日はコレ使って、お前の尿道弄ろうと思ってんのに。あんまりムカつくこと言われたら、何するかわかんないなあ、俺」

「やっ...！？それ、まさか...！」

だけれど僕が左足で菅原さんを蹴りながら彼を非難していると、彼は自分の横に置いてあった細い棒を掴み、僕に見せつけてきた。見覚えのあるシルエットに、ひゅっと僕の喉が鳴る。

菅原さんが手に持つそれは、僕らがまだ恋人になる前に使った尿道ブジーだ。ある意味思い出の品ではあるけれど、いい思い出とは言い難い。それに使うものが何であれ、自分の意思とは無関係で気持ちよくなってしまうから、僕は尿道責めが苦手だ。

「いやあ、俺らがやるって言ったらこのホテルだったからさあ。ここでコレ見るとあの頃を思い出すよな」

「や、あ、菅原さん、僕その、尿道のやつは本当に苦手でっ」

「そうだよなあ、あの日もこれ入れられて、泣いてよがって潮まで吹いてたもんなあ。かわいかったわ。顔真っ赤にして恥ずかしがってるくせに、イキ潮止まなくて泣いちゃう真壁」

「ッ、やだ、それ怖い、怖いからやだっ！！」

「俺にご褒美くれる約束だったろ？大丈夫、俺もあの頃より上達してるはずだし。痛くないようにするから」

「うっ、うう～～～...！」

菅原さんが言ったように、当時あの棒を入れられた僕は、未知の快感に困惑していたのに、気持ちよすぎてイキまくって、潮まで吹いて失神した気がする。なのに無理やり犯されては起こされて、本当に死ぬかと思った。それをまたやろうと言うのか。

嫌だ。普通に嫌だ。でも頑張った菅原さんにご褒美はあげたい。どうしよう、自分で言ったことだけれど、もうすでに前言撤回したいと言葉を詰まらせる。けれど僕が迷っている間にも、僕の熱の先端とブジーに潤滑剤のクリームが塗られて、準備が進んでしまう。

「う、怖い、やっぱり怖いですってえ！」

「前も大丈夫だったろ？だから今日も平気だって」

「い、痛かったら、絶対やめてくださいよ！」

「もちろん。痛いのはしない約束だからな。だけど今日は、多分お前から入れてくれって頼むようになると思うぞ？」

「ひ、ッ、んん〜〜〜...っっ！！」

クリクリと先端に棒をあてがわれながら扱かれると、慣れ親しんだ指の感触に、身体が勝手に高まってしまう。軽く勃起したら、あとは菅原さんのなすがままだ。変に抵抗して中が傷ついたらと思うと怖いので、僕も言いなりになって身を任せるしかない。

一応、痛いことはしない約束は有効なようで、菅原さんも無理には棒を進めてこなかった。念入りにクリームを足しては、入れたり、出したりを繰り返して、馴

染むのを待っている。その配慮に安心して、僕も徐々に力を抜いていった。

しかしながら、用意周到に準備をしていた彼が、ただゆっくりことを進めているわけがなかった。最初は、尿道の中にムズムズした違和感があるのは、普段刺激しないところを無理やり擦られているせいだと思っていた。それが少しずつ、我慢できないほどの痒みに変わっていったとき、これが違和感ではなく異変によるものだと気づく。

ぱっと下半身を見た時、にやりと菅原さんが笑ったのに気づいた。なので今度は彼を睨んで、自由に動く左手で、しつこくクリームを塗布する手を掴む。

「ちょ、っと...！それ、普通のローションなんでしょうね...！？」

「んん？どうした？なんか変になってきた？」

「ニヤニヤしながら聞かないでもらえますか！？絶対確信犯でしょ！うう、や、やだ、も、大分奥まで...っ！」

はじめは先端付近にだけあった違和感が、今は根元の方まで広がっている。指では届かない奥まで疼いて、じくじくと熱くなっていた。痒い、引っかきたい、なんでもいいから痒みを沈めてほしいと、自分で足を擦ってもがく。だけれど身体の奥で起こる疼きは、太ももを閉じたところで改善されない。

「ふうう...ッ！ん、あ、や、あ、ああ...！！」

「おいおい真壁～？もじもじしてどうした？」

「〜〜っ！最低、最低ですよこんなのっ！僕の許可なく変なものを塗って！んんっ、くっ、う、さい、てえ、んも、ッ、う、ん、んんッ！」

「まあ待てよ。一回奥まで入れてみろって。もしかしたらとんでもなく気持ちいいかもしれねえぞ？」

「ん、はああああうううう.....ッッッ！！！？？」

ただ、これはあくまで地獄の入り口に過ぎなかった。痒い、痒いとばかり思っていたけれど、ぬかるんだ細い道を棒で広げられると、一気に痒みが快感に変化する。ゾクゾクゾクっと一息で高まる感覚に、一瞬息を忘れた。はっと自我を取り戻した時には、既にブジーはかなり奥まで進んでいて焦る。

「ふは、ああ...っ！あ、や、待って、これだめ、だめ、だめえ...！」

「ダメって言われても、まだ入れたばっかなのに」

「ッ、だ、って...！ふう、ん、んっ、こ、こんな、んんっ、ダメなの、奥まで入れるの、ダメで...っ」

変な塗り薬のせいで、中がこれほど過敏になるとは思わなかった。だけれどこのまま菅原さんの好きにされて、奥までブジーを入れられるのは更にまずい。薬なんかなくても、狂うほどに感じた場所だ。そこを犯されたら確実におかしくなる。

幸い、身体の左側は自由に動く。だから僕は、奥深くへ入りそうな棒を握って、最奥へ進むのを回避した。そのまま少しずつ引き抜いて、危険な場所から先端を遠ざける。

でも、僕の尿道全体に広がってしまった薬の効果は、あまりにも絶大だった。少しでも横の壁を擦ると、腰にも手にも力が入らなくなるほど気持ちがいい。今は塞がれているけれど、おそらくもう、この栓を抜いたらあっという間に精液が吹き上がってくるだろう。それくらい、どうしようもない快感が広がっている。

「うあ、あ、あう、ん、んんんっ！っひ、あ、あああううう...っ！」

「何してんのお前。良すぎてオナニーしちゃってんの？」

「ち、ちがっ、そんなことするわけっ」

「オナるなら抜くだけじゃなくて、入れるのもした方がいいぞ～」

「んあああああっっ！！！！？」

だけれど今日起こる不幸は、ただ行為そのものに関わることだけじゃなかった。菅原さんが適度に酔っているせいで、ナチュラルに鬼畜の所業を行ってくる。へらりと浮かれた顔で笑う彼は、下手をすると悪気はない。でも、悪いことをしている意識がある方がまだましだった。なぜなら、良かれと思って棒を上下に動かす彼を止める方法が見つからないからだ。止めてくれと頼んでも、どこか話の通じない菅原さんは、無意識に僕が苦しむ選択ばかりをしてくる。

「ひい、い、いいゝ いゝ いうううッ！！ま、っで、菅原さっ、あああう、ゆっくり、もっとゆっくりっ！！」

「んん？そうだよな、もっと深くまで入れないときもちくくないなあ」

「やっ、違う違うッ、ん、んゝ ～～～～っっ！！？？んんぎっ、だ、め、それ以上、奥はっ」

「じゃあ次は抜かないとなあ。いや、抜き差しするのがいいのか？」

「ひぐうっ！！？んはっ、だめ、だめ、あ、あう、んんううっ！！っぎ、ひ、あ、遊ばないで、玩具にしないでえ...っ！」

「んん、泣くな泣くな。ほおらよしよし」

「んっ、あ、あああああ...！！ああああんううううう〜〜〜ッッ！！！」

ぬぶぬぶと小刻みに出し入れされると、何度も何度も擦られる尿道から、頭まで快感が駆け抜けていく。それが嫌だと伝えたら、深く入れられそうになって、必死に足を閉じてカバーした。でもゆっくり抜かれても、また押し戻されるとき、上がってきた精液ごと戻されるから、それもそれで悶絶級の快感だった。

精液も一緒にかき混ぜられては、吐き出すはずだった液体を押し戻される異常な快感は、もはや気持ちいいのレベルを超えている。それに拍車をかける薬のせいで、痒いからもっと引っかいてくれと思うのが良くない。痒みをしずめてほしいけれど、引っかかれると目もくらむ快感が襲ってくる。いっそ射精して、溜まった快感も精液も発散したいのに、出口は塞がれている。ダメだ、こんなの狂う、菅原さんの希望だとしても無理だと、僕はとにかくブジーを引き抜くことにした。入れたいと言われても、こんなのは休み休みやらなければ壊れてしまう。

「ふあ、あ、イキたい、もう出したいっ！！んんっ、出させ、て、これ抜いてええ...ッ！」

「ええ〜？まだ入れとけよ、もったいないって」

「っ、後で、また後で入れていいからっ！だから今はっ」

「後で入れるなら一緒だろ？ほら、痛くないように普通のローションもかけてやるから。ぬるぬるになるからこれでいいな？」

「はぁ！？ちょっ、何してんですか！ああもうバカバカ、手にもかかってますって！！」

だけれどブジーを引き抜くことに決めた矢先、菅原さんの意味不明な理屈のせいで、僕は自分の熱と左手に、大量のローションをかけられてしまう。

これは特殊効果のないローションらしいので、液体に罪はない。問題があるとしたら、棒と僕の手にもかかったことだ。ただでさえ利き手の反対で動かしにくいと言うのに、ぬめりが加わってうまく掴めなくなってしまった。ふざけるな、いちいち余計なことをしてと、心の中で憤慨する。だけれど怒りが裏目に出て、苛立った手がずるんと滑った。その拍子に奥まで入り込んだ棒は、摩擦の減った中を進んでいく。

「ひぐぅっ！！？あふ、うう、ッ、ッッ！！！」

「お～、めっちゃ入りやすくなったな。ぬるぬる効果で」

「は、ああ、だめ、奥にいっちゃう、奥に入っちゃううっ！！」

絶対に進行を阻止したい僕は、どうにか滑る手で棒を掴むためにあがいた。それでも全然掴めないし、菅原さんは勝手に奥へと押し込んでいく。だめ、本当にだめ、奥だけはダメだと首を振っても、熱に浮かされた顔の菅原さんは止まってくれない。

「そろそろじゃねえか？お前のヤバいところに届くの」

「っ、や、あああ、だめ、おかしくなっちゃう、そこ入ったら、おかしくっ」

「でもどんどん飲み込んでくぞ？見ろ、ああもう入る入る...」

「ッッ！！！！ひ、あ、あああああダメダメダメええええっ！！！！」

どうにか彼の手を止めようと、僕は細くて掴みづらいブジーではなく、菅原さんの手を握ろうとした。でも、掴む対象が変わっても、僕の手が滑っているのは同じだ。にゅるんと摩擦のきかない指は、悪戯を防ぐには役不足だった。

見えているブジーの部分がどんどん短くなり、その分自分の中に埋まっていく長さが増していく。ダメだ、ダメだと首を振っても、勢いが止まらない。そして食い止めることに失敗した先端は、とうとう僕の最奥の壁を小突いた。

入り込んだブジーの先が、僕の大事な所を押す。いつもなら、菅原さんの指や熱が、反対側から押す場所だ。内側から直接前立腺を押される感覚は、相変わらず凶悪だった。わずかな刺激なのに、脳天まで耐えきれない快感が突き抜けていく。あがく暇もなかった。悪魔的な絶頂感が一瞬で僕を襲って、言葉も出せないままにイッてしまう。

「ひぎ———.....ッッ！！！！いあ、あ、あ、あゝっ！！」

「ううわ、のけ反り方エッグいな。どう？大好きなところ当たってる？」

「んくううッッ！！はひ、い、ッ、ああ、だえ、そこ、そこはだめ、んんっ、ひ、怖い、感じ過ぎて怖いっ！！いや、ああ、あ、あゝ~~~~~
~ッッッ！！！！」

とん、とん、と押されるたびに、身体がおかしな方向に曲がっては跳ねる。強い絶頂を、どう逃がそうかと四苦八苦しているらしい。でも出口は塞がれているし、なんなら薬も浸透している。本来なら暴かれるべきではない繊細な場所を、優しくかき混ぜられると頭がはじけ飛びそうになった。

イッてから、次にイクまでの間が短すぎる。息をつく間もない絶頂に、目の前がチカチカした。自分でも、だらしのない顔になっているのが分かる。唾液を飲み込むことができないし、声を止めることも無理だ。妙な言葉を口走っている気もするけれど、そこに気を回す余裕がない。

「んあああゝ あゝ あああっ！！ああああイッ、っぐ、んんっ、んんうゝ うゝ うゝ っ！！ひっ、あああう、も、だめ、あふっ、頭おがしぐ、なっ、んっ、ああ、あああっ！！」

「大分しんどそうだな？イキ過ぎて苦しい？もう嫌？」

「〜〜〜ッ！！っ！！っ、た、すけ、て、僕、僕もお、あ、ああああぐっ！！」

バチンと、何度も限界を超えそうな快感がこみ上げてくると、勝手に涙がこぼれた。何が苦しいのかも分からなくて、半狂乱で叫ぶしかない。無理だ、こんなのは頭が煮える。続けられたら狂ってしまうと、必死で菅原さんに止めるよう訴えた。

でも、彼の今日の目的地はここじゃなかった。むしろ通過点に過ぎないことが、僕にとっては何よりも恐ろしい。

「いやぁ、やっぱいいなぁ。お前がエッロい顔して叫んでるの」

「あ、ああ、や、だ、もおやだ、死ぬ、から、死んじゃうからぁ...ッ！！」

「てか俺さぁ、実は真壁の尿道弄ってる時に、後ろから前立腺責めたらどうなるか試してみたかったんだよなぁ」

「ッッ！！！？や、ぁ、な、に、何言って」

「見ろ！そのために専用バイブも買った！ちゃんと専門店に行ってさぁ、真壁の形に合いそうなやつ選んできた」

僕の寝込みを襲って縛った挙句、薬を塗って尿道をおかしくしたとんでもない恋人が、今度は嬉しそうに卑猥な玩具を取り出していた。あまりにも爽やかな笑顔は見ていてほれぼれするけれど、彼が握る玩具はかわいくない。

菅原さんが意気揚々とパッケージから取り出したのは、おそらくアナルバイブだ。太くはないけれど、先端部のでっぱりがどこを刺激するのかを想像すると怖い。

それに、寝る間を惜しむほどの激務だったのだから、少ない余暇の時間で大人のテーマパークに行くな！と言ってやりたい。僕との時間を大切にしてくれているのは嬉しいけれど、ぬかりの無さがセフレ時代より成長していて困る。思いやりが変な方向にねじれた彼に、僕はただただ不安を感じた。

果たして今日、僕は生きて帰れるのか。このままここで発狂して、性器が使い物にならなくなったらどうしよう。嫌だ、菅原さんがすることだからって、なんだって許せるわけじゃない。やめてよ、その真っ黒な拷問器具にローションを塗らないでと、ベッドの上で震える。

「う、ううっ、やだ、やだぁあっ！許し、て、そんなの使わないで、怖い、怖い...っ！」

快感から来る涙ではなく、僕は純粋な恐怖で泣いていた。ひぐ、としゃくりあげて、シーツに目を擦りつける。それを見て、菅原さんも手を止めていた。

そうだ、恋人が泣いているんだぞ。もうあの頃と違って、僕らはセフレ関係の先輩後輩じゃない。だったら震える僕に免じて、そんなヤバそうな玩具を挿入するのをやめるべきだ。菅原さんにだって慈悲はある。特に最近は、僕が本気で嫌がったら絶対に止めてくれるんだ。だからきっと今日もそうなるはずと、うるんだ目で彼を見上げた。

するとどうだろう。なぜか突然、ぎゅうっと菅原さんが僕を抱きしめてきたじゃないか。しかも、優しく頭を撫でるおまけつきだ。え、なんなの突然、さっきまで僕を散々いじめてきたくせにと、彼の行動が読めずに固まってしまう。けれど僕の動揺なんてお構いなく、菅原さんは2発、3発と、僕の心を打ちぬく言葉を飛ばしてきた。

「そんなに泣いちゃって。かわいいな、真壁」

「へ...？」

「泣いてるお前って、いつ見てもかわいすぎるな。大好き、たまんない」

「っ！？な、なっ、何、いきなり」

「んん、エロい、好き、全部好き」

「や、あ、え、え...っ！？」

まだ酔いの醒めない菅原さんは、おそらく普段は言わないことを素直に口にしてしまっている。しかも行動までもがおかしくなっていて、ちゅ、ちゅ、と額や頬にキスまで降らせてくるじゃないか。

はぁ？ちょっと待ってよ、なんで僕にメロついてんのと、ぶわりと全身が熱くなる。さっきまでは恐怖で冷えていた身体から、じんわり汗が滲んでいた。

急に好きなんて、しかも大好きまで交えて、連続で言うのはズルい。ダメだって、僕も菅原さんの事、先輩としても恋人としても大好きなんだから。そんな風に俺も好きって感じのことをされたら、身体の芯まで喜んじゃうのに。やめてよ、溶ける、グズグズになると、僕はうっかり自由に動く左腕を、彼の背に回していた。

そのせいで、孔を塞ぐことができた絶好のチャンスを逃した結果、ずるんと一気にバイブが押し込まれてしまう。

「んは...ッ！！？や、ん、んうううっ！？」

「やっぱり簡単に入ったな。賢くてエロいお前のことだから、ここは絶対準備してると思った」

「っく、う、うううう...！！だ、って、菅原さんが...！ホテル集合って、言うから...！」

「遅れてくる俺の為に、先に広げて待っててくれたんだ？」

「〜〜〜ッ！！」

ぬち、ぬち、とバイブを軽く前後に動かす仕草が、前立腺を探すものと分かっているのに、羞恥でいっぱいいっぱい抵抗を忘れてしまう。

彼の言葉を、全然否定できなくて悔しい。でも菅原さんの言ったことは、恥ずかしいけれどその通りだ。そうだ、僕だってめちゃくちゃ期待していた。疲れている先輩を誘ってはだめだと自分を律していたので、今日の連絡に浮かれて、即ハメされても大丈夫なように万全を期して待っていたんだ。

そりゃそうだよ、恋人がホテルで待っててなんて、週末に言ってきたんだ。ワクワクしない人がどこにいるんだ。久しぶりに二人きりでゆっくりできる。僕だって、言葉にしないだけでかなり楽しみにしていたんだ。だから我慢した分、僕を愛している証明を、もっともっと彼から与えてほしくなる。

「っ、わ、わざわざ、準備したんですから...！ひ、う、そんな、バイブじゃなくて...！」

「それも嫌ってほど食わせてやるから。今はこっちで楽しませろよ」

「ふう、ッ、あ、ああ、まっ、あ、ひううううっ！！？」

だけれど先輩は、買ったばかりの玩具に夢中だ。ある程度慣らし終わると、ぐん、といい場所を押し込んできた。バイブで押された前立腺は、既に内側から刺激を受けて、いつもより過敏になっている。ぶるぶるっと全身が震えたのは、ただ感じただけではなく、軽い絶頂も感じていたからじゃないだろうか。

「んはああああ...ッ！！あ、うう、や、だめ、そこぐりぐりしちゃやだあ...！」

「ぐうって押される感じする？」

「はふっ、ん、んんんんッ！！うああ、あ、や、両方だめ、んんっ、あ、ああっ！」

自分の締め付けだけでも、バイブの出っ張りがうまい具合に当たってしまい、勝手に良いところを押し込んでしまう。そういう設計なのか、菅原さんの当て方が上手いのか、とにかく時間が経つにつれてじわじわと快感がせりあがってきて苦しい。菅原さんが気まぐれに動かしたりすると、少し膨らんだ先端がまんべんなくお尻の中を擦るから、腰から下が全部ゾクゾクしてしまう。

ああ、これはやばい。バイブが一番気持ちいいところから逃げていかない。どうしよう、今は尿道の棒が少し抜け出ているからマシだけれど、両側から刺激されたりしたら。ダメだ、それだけは避けなければと、僕は自分の身体をひねって、菅原さんが責めにくいよう抵抗する。

「ふうううう...っ！は、は、あふ、ん、んんんう...！」

「なんだよ、そんなグネグネして。あ、もしかして足りない？そっか、押さえてないと抜けてくんのか。じゃあ俺がまた、良いところに戻してやる」

「ひんううううッッ！！？？？」

けれど身体の半分が上手く動かないせいで、できる防御にも限りがある。前に伸びてくる先輩の手をどうにか掴んだけれど、反対の手も伸びてきたらもう対策できない。先端から出た棒を押されれば、またあの目もくらむ快感の泥沼に叩き落とされた。

「うはあああああッ！！あゝ ああああんんうっ！ま、あ、あ、あああ
あっ！！」

「よしよし、これで前はばっちりだな。ほら、今度は反対からもトントンしてやる」

「ンぎいっ！！？あう、ん、ン`ン`んッッ！？っひ、だ、だえ、どっちもしちゃだめえええええっ！！」

そして尿道側から責められた前立腺は、僕の中にあるバイブで押し込まれるせいで、両側から挟み撃ちされていた。とん、とん、と軽く押されているだけなのに、そのたびに抗えない快感に支配される。ビキッと全身が突っ張って、おかしい方向に身体が曲がる。

自分の熱の根元が、快感を生み出す源泉のようで、無限に絶頂を生み出していて怖い。しかもそれが、間髪なく次々と訪れる。何これ、僕は知らない、こんな快感を知ったら戻れなくなると、とにかく暴れて責め苦を和らげようとした。でも僕が泣いて暴れるほどに菅原さんは喜ぶばかりで、快感はちっとも穏やかにならない。

「ひいいいいっ！！ああああやだやだっ、つも、やあああああああっ！！んんぎっ！！はっ、ああ、イク、イクイク、ずっとイッてるからやめてえええッッ！！！」

「お～お～、本気で嫌がってんな。そんなに好きか、コレ？」

「～～～ッッ！！ひ、いいい`いんっ！！だ、め、どっちも、されたらあ...っ！はふっ、んん、ん、ん`～～～ッッッ！！」

「ほおら、両方からトントンしてやるからな～。大好きなとこ、両側から挟み撃ちされてイケよ」

「んぐうううう.....ッッ！！はひっ、ひ、いいゝ いゝ いいっ...！！あふ、う、う、うううんんっ！！」

イッている最中も、ぐに、ぐに、とブジーとバイブから揉みこまれると、ぶわっ
と頭が真っ白になる。僕は今、息が出来ているのだろうか。出せないからか、イ
キ方もおかしくなっている気がする。ひ、ひ、と切羽詰まった掠れた息が漏れ
て、上手く酸素が吸えていない。

ゆっくり出し入れされるバイブだけでも苦しいのに、僕の熱から出た棒の先を、
爪で軽く弾かれる。挟みこまれた弱点が悲鳴を上げて、バンッと身体ごと跳ね上
がった。限度を超えた快感に、僕はもうなす術がない。

ボロボロと涙を零して、ベッドの上で叫んだ。この快感に殺されると、その時の
僕は本気で思った気がする。

「うああああゝ あゝ あゝ あもう無理、もお無理いいいいいッッ！！！！死ん
じゃう、死んじゃうううっ！！」

「まだイケるだろ？てかまだ、このバイブも本気出してないから」

「んあゝ ———.....ッ！！！！？」

ただし、人間というのは限界を超えると、自然と色々な機能を止めて、最も大事
な部分を守ろうとする。だから突然バイブが震えて、後ろ側から前立腺を振動さ
せられたとき、ぐっと呼吸が止まった。

前立腺の壁越しに、尿道の棒にも振動が伝わっている。媚薬で敏感にされた壁が、一斉に震える快感は言葉にできなかった。ただただ暴力的な絶頂に、僕の視界が真っ暗になる。

「~~~~っ！？う、は...！！」

それまで僕をいじめていた全ての玩具からの快感が、瞬時に遮断された。かわりに全身の力も入らなくなって、少しの間暗闇の中をさまよう。

それからまた、ふっと意識が浮上した。どうにか息が出来ると安心したけれど、右半身の拘束も、僕に埋められた玩具も、何一つ意識を失う前と変わっていなくて絶望する。

「え、ッ、う、ううう...！？」

「真壁、今少し意識飛んだ？やっぱスイッチ入れるのはヤバかったか」

「はえ、う、うう...！もお許して、こんなの無理、無理で...！」

「こういうキツめなこと、最近はしてなかったもんなあ。ひっさしぶりに、ぶっ飛んで泣くお前が見たい」

「ッ！！？いや、やっ、しないで、ホントに無理、無理って言って」

「ほ～ら、バイブでぐりぐりするやつ行くぞ？今度は押し込んでる間に、尿道側から責めたらどうなるかも試そうな？」

「うぐっ！！？ああ、あ、だめっ、ああああダメダメダメッ！！ひ、あ、ああああうううっっ！！ん~~~~っ！！んんうう`あああああああ
あっっ！！！！？？」

しかも一度失神しても、再びバイブのスイッチが入れられて、僕の苦しみは延長してしまった。どうしてこんなにいじめるの、今日はいつもの菅原さんより優しくない、必死に叫んで止めるように訴える。

でも手加減を覚えた彼は、あえて僕の言う通りスイッチを止めることで、意識が途切れる直前で刺激を弱くした。そして僕がほっとした瞬間を狙って、暴れたせいで飛び出た尿道側の棒を押し込んでくる。ヤバイ、そっちもヤバイと目を見開けば、振動にばかり気を取られていたバイブでコリコリと前立腺を擦られた。

「くひ...ッッ！！？あ、あゝ、あう、んんっ、あ、や、ああああっ！！」

「なんだよ、バイブの電源は切ったけど？」

「んああ、あ、っ、りょ、ほお、だめっ！！あっ、ひ、ぎもち、い、の、終わらない、終わんないいいいっ！！」

「そっかそっか、終わる方がいいか。それならもっと、いっぱい気持ちいい方がいいなあ？」

「ンゝんううううあああああっ！！！！？？あああああダメダメッ、ッ、～～～～っ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー